
魔法とねこ

愁しゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法とねこ

【Nコード】

N6361E

【作者名】

愁しゆう

【あらすじ】

ある晩、僕の部屋に魔法使いが現れた。願いを叶えてくれると言われた僕は…。

「キミの願いごとを叶えてあげるよ」

ある夜、なぜか突然部屋に現れた、真っ黒なフードをかぶったひとがそう言った。

「ひとつだけ、叶えてあげる」

なんでも？そう僕は訊き返した。

「ああ、なんでもひとつだけ」

それなら…

「猫になりたい」

僕はそう答えた。

猫になりたい。僕の好きなあのひとが大好きな猫に。

そうしたら、きつと僕を好きになってもらえる。ぎゅっ、て抱きしめてくれる。

「キミの願い、叶えよう」

魔法使いさん（？）が、大きな水晶がついた杖をえいっとうとひと振りすると、キラキラと瞬く星が僕に降り注いだ。

眩しくて目を閉じて、また目を開いたら、魔法使いさんはいなくなっていた。

あれ？

「にゃああん？」

声を出すと、猫の鳴き声になっていた。

姿見に映った僕は、蒼い瞳をした真っ白な猫になっていたんだ。

願いが叶った！これで、あのひとに逢いにいける！

僕は開いた窓の隙間から、外の世界に飛び出した。

猫のからだって、すごく身軽なんだ。

僕は鉄棒で逆上がりもできないし、跳び箱だって飛べない。

でもいまはぴょんっと塀に登って、やあって屋根に登れる。

いまのぼくなら、体育で5を取れるかもしれない。

「にゃん、なああん」

鼻歌まじりに塀や屋根を伝って、あのひとのもとへ向かう。

どきどき、わくわく。

電気のついた部屋の窓を覗き込むと、そのひとは机に向かっていた。

遅くまで勉強してるんだあ。頭いいもんね。

勉強の邪魔、したくないけど…

「にゃあん」

僕に気づいて。僕を見て。

僕が僕である限り叶わない想いも、この姿ならきつと叶うから。

カリカリと窓を引っ掻く。

「あれ？」

やった！こつち見たよ！

僕の姿を見ると、彼は顔を綻ばせて近寄ってくると、窓を開けた。

「にゃああんっ」

僕に気づいてくれて、ありがとう。

「どしたの、おまえ」

いくらなんでも図々しく部屋の中に入れない僕を、彼は抱き上げて部屋に入れてくれた。

あつ、やめて。顎を擽られるとゴロゴロって喉が鳴っちゃうよ。

ん…でも、気持ちいい…。

「美人さんだなあ。首輪してないけど、どっかの飼い猫か？」

「なあう」

違うよ。僕はあなたにこうしてもらったためにきたんだもん。

「はは、返事してるみたいだ。俺の言葉、わかるのか」

「にゃん」

うん。

僕がそう返事すると、ますます彼は笑った。僕の大好きな笑顔で。

僕の姿は、どうやら彼にとっても気に入られたらしい。

ありがとう、魔法使いさん。

「可愛くて美人な猫さん。帰る家がないなら、今夜は俺と一緒に寝ませんか？」

「なああん？」

いいの？首を傾げてみたりして。

いきなりそんな…恥ずかしいけど、いいのかな？

小さな心臓がドキドキで破裂しそうだよ。

「いいよ」

彼にも僕の言葉がわかるみたいだ。

クスクスと笑いながら、彼は僕を抱っこしたまま、布団に入った。

「おやすみ。いい夢を」

「にゃう」

うん。あなたも。

あたたかなぬくもりに、もったいないなと思ったけど、あつという間に眠ってしまった。

ふわふわと、まだ夢の中にいるような気分で瞼をあげた。

すぐ近くには、大好きな彼の顔があつて、幸せだけどなんだかくすぐったい。

「おはよう、起きた？」

僕の顔を覗き込んでいた彼は、僕が目を開けると微笑んでちゅつ、と額にキスをくれた。

「おは…よ…。も、起きてたの？」

からだを摺り寄せると、彼は僕を逞しい腕で抱きこんだ。

密着する体温が気持ちよくて、またとろとろと眠気を誘う。

「ああ、起きて…きみの寝顔を見てた」

「…ばか」

恥ずかしいこと、言わないで。

朝なんだよ？朝、なんだから…。

「なんか、いい夢見てたみたいだな？嬉しそうな顔してた」

僕の気持も知らないで、彼はちゅっちゅっって髪とか顔とかに、
悪戯なキスを仕掛けてくる。

「見てた…よ。僕が…猫になって…」

「猫になって？」

「…おしえない」

僕がどれだけあなたを好きか、なんて。いまさらだよ。

猫になっても、あなたの顔を見たくて、抱きしめてほしくて…
ずっと恋い焦がれて。

片想いの時間が長かったから、きつとあんな夢を見てしまったんだ。

「俺にはおまえが十分猫に見えるけどな。…気まぐれで、可愛くて」

「そう、かなあ？」

「ああ。真っ白で、きつと目なんか蒼くて…美人なんだろうなあ」
びっくりした。

僕が本当に猫だったら、彼の好みぴったりだったんだ。

…でも、ちょっとフクザツ。

「…猫なら、よかった？」

ぷつと頬を膨らませると、彼はまさか、と笑って僕の背中を撫でる。

少しゾクゾクする触りかたに、思わず小さく声が出てしまった。

「猫なら、こんなふうに愛せないだろ」

「…ばか、ばか…」

高鳴る鼓動を隠すように、からだを縮めて彼の胸に顔を埋めた。

「もう少し、ベッドにしようか？」

「…うん」

そうして、僕の意識もからだも、彼の手でとろけていく。

両想いなら、やっぱり猫よりも…ひとがいいかな？

贅沢言ってごめんなさい、魔法使いさん。

でも、僕はいまとても幸せです。

（後書き）

ベタで甘い話大好物です！（∴アホ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6361e/>

魔法とねこ

2011年1月16日00時32分発行